

社会環境との関係性から見た発達障害の可能性のある学齢期の子どものレジリエンス

○ 北星学園大学 社会福祉学研究科 博士後期課程 朝岡 健吾 (7605)

キーワード：子ども・レジリエンス・発達障害

1. 研究目的

知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた通常の学級に在籍する小学生の割合は推定7.7%であると言われている。1クラス30人学級で換算すると1クラスあたり2.3人在籍していることになる。発達障害は他者との社会関係の形成や社会活動への参加に困難を生じさせるので、他者との関係性における相互作用において顕著に現れる特性である。発達障害の可能性のある児童は他者との関わりに苦手意識を持つことで「生きづらさ」を感じることがあるが、彼らが抱える「生きづらさ」は見過ごされがちである。最近の研究によって、主に環境学関連の分野で用いられてきた「社会生態レジリエンス」は「人々が彼ら自身の幸福や健康を維持するための心理的、社会的、文化的、物的資源を探し出すことのできる能力であるとともに、それらが文化的に意味のある方法で提供されるように個別的、集団的に交渉することのできる能力」であることがわかった。本研究においては、虐待や受傷経験など極めて深刻な状況ではなく、発達障害の可能性のある児童が抱える日常生活における対人関係の困難さに焦点を置く。彼らと社会環境との関係性に着目し、困難を引き起こす要因や前向きな適応を促進する要因を可視化する。そのために「社会生態レジリエンス」の概念枠組みを用いることを試みる。「日常生活上に存在するレジリエンス促進要因」が彼らの変容を促進することで、彼らにどのような影響を与えているのかについて整理することを本研究の目的とする。

2. 研究の視点および方法

小学4年～6年生の児童は、幼児期から学齢期に移行し始める時期である9,10歳の節を迎えて発達上の個人差が顕著になり始める年齢層である。通級指導教室は通常学級に在籍している発達障害の可能性のある児童に対し週1回程度の発達上の特性に基づいた個別指導を行う。発達障害の診断は通級指導教室を利用するための必要要件ではないが、利用の可否は児童や保護者の意向や教育的ニーズを尊重して市町村教育委員会が決定する。そのため、本研究の対象者は通級指導教室を利用している小学4年～6年生の児童とした。複数の都道府県から小学4年生～6年生の男女8名の児童とその保護者の協力を得ることができた。本調査に用いたインタビューの設問は「家族のこと（特にお父さんやお母さんについて）について教えてください」、「自分のことについて教えてください」、「友達のことについて教えてください」、「学校のことについて教えてください」の4項目合計10

間で構成した。この設問に沿って半構造化面接にて ZOOM を用いた非対面で調査を実施した。データ分析には QDA ソフト(MAXQDA 2022)を使用した。分析方法は質的データ分析を用いた。分析において、リサーチ・クエスチョンに沿いつつオープン・コーディングを実施し焦点コードを生成した。また、コードマトリックスを作成して焦点コード同士の関係性を整理してサブカテゴリーとカテゴリーを構築して再文脈化を行った。

3. 倫理的配慮

本研究について事前に北星学園大学の研究倫理審査委員会の承認を受けた(21-研倫 22号)。また、日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守して実施した。本研究に関して開示すべき COI はない。研究協力者である通級指導教室に在籍している児童の募集には SNS を活用した。研究協力者の保護者に対し、説明書と同意書を送付した上で研究の概要や目的、期待できる結果、倫理上の配慮、調査の実施方法を説明した。任意の調査であること、個人情報取り扱いへの十分な配慮、ZOOM を使用して非対面で実施すること、ZOOM の録音機能を使用すること、回答者は児童だが必要に応じて保護者の助言を求めることができることを説明書に記載した。調査への参加にあたり事前に同意書を提出していただいた。

4. 研究結果

インタビューデータを分析した結果、4つのカテゴリーが生成された。【直接的に作用する保護的要因を持つ関係性】というカテゴリーは2つのサブカテゴリーと5つの焦点コードで構成された。同様に【間接的に作用する保護的要因を持つ関係性】というカテゴリーは3つのサブカテゴリーと8つの焦点コード、【リスクを伴う関係性】というカテゴリーは2つのサブカテゴリーと4つの焦点コード、【児童の成長】というカテゴリーは3つのサブカテゴリーと7つの焦点コードでそれぞれ構成された。

5. 考察

本研究において、レジリエンス促進要因である【直接的に作用する保護的要因を持つ関係性】が児童の攪乱状態からの変容を促進しつつ、同時に、【間接的に作用する保護的要因を持つ関係性】を有する社会環境の中で児童は肯定的に受け入れられた経験を通じて成長していくことがわかった。児童は周囲の配慮や理解の不足により生じる「対人関係の困難さ」によって攪乱状態に陥り「生きづらさ」を感じる。その一方で、児童の周りには彼らへの理解や配慮を示し、「気付き」や「学び」の機会を与え成長させてくれる人々が少なからず存在している。社会生態レジリエンスの概念枠組みを通じて見た「生きづらさ」を抱える発達障害の可能性のある児童とは、対人関係による困難を目の前にしてなすすべなく立ち止まっているだけでなく、困難を抱えつつも彼らを取り巻く社会環境との相互作用を通じて変容し続けている存在といえる。